

近代韓国図書館史の研究

—植民地期を中心に—

宇治郷 毅

はじめに

I 日本統治下の公共図書館運動

1 武断政治期 (1910—1919)

(1) 寺内総督の言論, 出版弾圧と「愛国蔵書
懐尽」事件

(2) 隈本繁吉の官立図書館設置案

(3) 日本人居留民による私立図書館運動

2 文化政治期前期 (1919—1931)

(1) 社会教育行政の開始と松村松盛の図書
館論

(2) 官公立図書館運動

(3) 朝鮮人による私立図書館運動

3 文化政治期後期 (1931—1937)

(1) 社会教育行政の強化と宇垣総督の図書
館論

(2) 第29回全国図書館大会

(3) 農村図書館設立運動

4 戦時期 (1938—1945)

(1) 戦時下の図書館と朝鮮総督府図書館の
役割

(2) 朝鮮図書館連盟の結成

II 日本統治下の学校図書館運動

1 京城帝国大学図書館

2 官立専門学校図書館

(1) 京城高等商業学校図書館

(2) 京城医学専門学校図書館, その他

3 私立専門学校図書館

(1) 普成専門学校附属図書館

(2) 延禧専門学校附属図書館, その他

おわりに

はじめに

本稿は、拙稿「近代韓国公共図書館史の研究—開化期から1920年代まで—」(本誌30号, 1985. 9)の続稿である。前稿では韓国の開化期から1920年代までの公共図書館史を略述したが、本稿では植民地期全期間にわたる公共図書館の発展過程を再検討してみた。1910年代, 20年代については若干重複するところもあるが、できるだけ前稿で書きもらした事項を中心に論述した。本稿執筆に際し注意した点は、韓国公共図書館の発展過程をできるだけその時代の政治, 社会状況の関連の中であとづけ, 同時に社会教育行政全般の中での位置づけを明確にしようとしたことである。かくして植民地という条件下にあっての韓国の図書館の特殊性, その独自の発展過程を若干なりとも明らかにしようとしたのである。学校図書館

については、紙数の関係で高等教育機関の図書館に限定した。

時期区分は武断政治期, 文化政治期前期, 文化政治期後期, 戦時期とした。これは図書館の発展史がこの時期区分と深く対応して, 大きく変化していると考えたからである。

なお本稿では, 国名表記については韓国としたが, 地域名, 人名表記については当時の用法に従い朝鮮, 朝鮮人とした。

I 日本統治下の公共図書館運動

1 武断政治期 (1910—1919)

(1) 寺内総督の言論・出版弾圧と「愛国蔵書懐盡」事件

1905年11月, 乙巳条約によって韓国を

完全に保護国とした日本は、第一代韓国統監として伊藤博文を派遣し、韓国の外交、内政全般にわたる支配権を確立した。この日本の支配に対して、いわゆる抗日啓蒙実力養成運動が起った。それは言論、愛国書籍、新教育(私立学校)、学会による国権回復、民族実力養成をめざす文化教育面での闘争、また武力による日本支配打倒をめざす義兵運動として現れた。これに対して統監府は、光武新聞紙法(1907年7月)、私立学校令(1908年9月)、教科書検定出版法(1909年3月)、保安法(1909年10月)等の弾圧法規を矢つぎ早に公布し、仮借なき弾圧をもってのぞんだ。とくに1909年赴任した寺内正毅統監は警務総長明石元二郎をして、抗日的な言論、出版機関、私立学校、民族団体に言語に絶する弾圧を加えさせた。これは1910年8月の「日韓併合」前後ピークに達したが、とくにその年11月の言論、出版弾圧は韓国図書館史上の一大事件であった。これは寺内正毅初代朝鮮総督による40余种20万冊に達する朝鮮語図書書の押収、焼盡事件であった⁽¹⁾。白麟氏は彼の名著『韓国図書館史研究』の最後にこの事件を「愛国蔵書恢盡」と呼んで記述しているが、その実態は呉允台氏の表現を借りれば次のようなものであった。

「また朝鮮民族の民族正気や、その国家意識を撲滅するため、忠義録、武勇伝、偉人伝、歴史書等を、昔の中国の秦の始皇帝のように焚焼してしまい、販売禁止を厳命した。1910年11月に、日本憲兵、警察、朝鮮人憲兵補助員を動員して、鍾路一帯の書店と全国各地の書肆、郷校、書院、旧家等を急襲して、張志淵著『大韓新地誌』、李採丙著『愛国精神』、申采浩著『乙支文徳』、玄陰著『美国独立史』

等およそ51種20万巻を焼いてしまい、今後このような本を販売する者は厳罰に処すると命令を下した。このようにして総督府は、言論機関を強圧し、読書の自由を奪ってしまった。⁽²⁾」

この事件は、ナチスの焚書に匹敵する20世紀の一大焚書事件であったが、単なる言論出版弾圧にとどまらず、やっと近代化への端緒についた朝鮮にあっては民衆の読書手段を大幅に奪うものであり、朝鮮の近代化にブレーキをかけるものであった。これは当然、1900年代に入ってから起った朝鮮人による図書館運動にも打撃をあたえるものであった。この点について、権恩璟氏は重要な指摘をしているので引用しておこう。

「1910年というのは、韓国に近代的な印刷技術による大量出版が始まってそれほど時間のたっていない時であった。このような時期に数万巻の図書が押収、焼却されてしまって、言論・出版活動が禁止されたのは韓国の文化発展にこれ以上致命的なことはなかった。特に焼却された書籍が児童、青少年のための本であったことは、この“図書焚毀事件”が図書の損失だけでなく、日帝時代の児童図書出版が少数であったことを考えると、児童、青少年の読書習慣形成に致命的な被害を及ぼしたものと言えるであろう。これはその当時だけでなく、今日の公共図書館の利用不振にも大きな影響を及ぼしていると思われる。⁽³⁾」

(2) 隈本繁吉の官立図書館設置案

1908年3月、韓国政府の招聘に応じて学部書記官として京城(現在のソウル)に赴任した隈本繁吉は、1910年8月の日

韓併合以後も朝鮮総督府学務局学務課長として在任し、植民地教育行政の第一線に立った人物である。彼は翌11年2月に台湾総督府に転任するが、この短い間に朝鮮植民地教育制度の骨格づくりに敏腕をふるった。現在この時期の彼が作成した資料が『隈本繁吉文書』⁽⁴⁾として残されているが、その中の「朝鮮公立普通学校及官立諸学校整理案」⁽⁵⁾中に彼の官立図書館設置案が提案されている。それは以下のごときのものであった。

「京城ニ官立図書館ヲ設置スル件教育ガ独り子弟智徳ノ上進ヲ目的トスルノミナラズ民心ノ融和及一般風俗ノ改良ニ資スルモノタルハ特ニ言ヲ須サス 随テ学校教育以外ニ図書館ヲ設ケ図書其他一般文献ノ徴スヘキモノヲ蒐集保存シテ考古ノ資料ニ供シ兼テ公衆ノ閲覧ニ供スルハ緊要ナル施設ノ一タルヘシ 朝鮮ノ実情ニ照シ未ダ数多ノ図書館ヲ設クルノ機運ニ達セサルヘキモ少クモ京城ニ於テ一ノ図書館ヲ設営スルコトハ敢テ難事ニアラサルヘシ 旧農商工部庁舎ノ如キ内地人朝鮮人共ニ出入ニ便ナル地区ニ存在セル建物ヲ以テ之ニ充テ李王家其他篤志者ノ図書又ハ金品ノ寄贈ニ依リ利便ノ加フルアラハ国庫ノ支出ヲ要スル寧ロ少額ニ過キサルヘシ」

これは武断政治期、日本人官僚によって言及された唯一の図書館設置論であったが、ここに現れている思想は2年前佐藤寛(李王宮顧問)が雑誌『朝鮮』誌上で展開した官立図書館設置論⁽⁶⁾の系譜をひくものであった。ここで隈本は、教育の目的を“子弟智徳ノ上進”“一般風俗ノ改良”とならんで“民心ノ融和”においている。ここで言う“民心ノ融和”とは何か。この意味を理解するためには、彼

の教育論全体の検討が必要となるが、たとえば彼の教育思想がもっとも集約的に表現されている『秘教化意見書』を見ると、その中で彼は教育施設の目的を朝鮮民族をして“帝国ニ帰服スルノ心情ヲ懷抱スルニ至ラ”しめ、“帝国ノ順良ナル臣民”とすることにおいている。彼は言う、“余ハ朝鮮民族教化ノ帰趣ヲ「順良化」ニ求メンコトヲ希望ス”⁽⁷⁾と。ここから察せられるように、彼の言う“民心ノ融和”とは、日本帝国に帰服し、日本民族と融和する朝鮮民族の育成であった。彼にとっては、図書館もまた他の教育施設とならんで、以上のような意味での教化機関の一つであった。このような教化機関としての図書館論が隈本の官立図書館設置論の核心であったが、これは1920年代以降の朝鮮総督府の図書館行政に継承されていく思想でもあった。

(3) 日本人居留民による私立図書館運動

苛酷な武力弾圧に終始したいわゆる武断政治期に、教育文化の発展する余地はなかった。旧韓末、一時萌芽の見られた朝鮮人による図書館設立運動も、この時期すべて消滅した。またこの時期朝鮮人による図書館設立は一館も見られなかったが、日本人居留民による若干の私立図書館設立運動はあった。「日韓併合」以前にも日本人設立になる少数の図書館は存在した。たとえば1901年10月設立の釜山図書館は、韓国最初の公共図書館であったし、その他江景文庫(1907年2月)、木浦図書倶楽部(1907年7月)、京城文庫(1909年1月)などがあった。併合後も、個人によって設立されたもの、学校

組合によって設立されたもの、教育会によって設立されたもの、宗教団体によって設立されたものなど約14館（1918年現在）の私立図書館が存在した。⁽⁸⁾しかし、これらは狭い日本人居留民社会を対象としたもので、蔵書量、利用者も少なく、近代公共図書館というにはほど遠い存在であった。

2 文化政治期前期（1919—1931）

(1) 社会教育行政の開始と松村松盛の図書館論

三・一独立運動（1919年3月）という全朝鮮民族による抵抗運動に直面した日本は、それまでの武断政治を改め、いわゆる「文化政治」に転換せざるを得なくなった。官制改革を行ない、朝鮮総督の任用を文官にまで拡大し、憲兵警察制度を廃止し、普通警察制度を導入した。また「治安の維持」「民意の暢達」「内鮮人差別撤廃」とならんで、「文化的向上」を施政の眼目とし、文化教育面でも大きな改革をほどこした。特に制限された範囲ではあったが、朝鮮語の新聞、雑誌の発行や、集会、結社の自由が認められたことは、私立学校設立運動や図書館設立運動にもあずかって大きな力となった。また1922年の「改正朝鮮教育令」の公布は、朝鮮に初めて大学教育を認め、朝鮮人にも師範学校や大学進学への道を開き、朝鮮人児童対象の普通学校増設を可能にした点で、大きな意義を有するものであった。

またこの時期学校教育とならんで、始めて社会教育が着手され、博物館、図書館、青年訓練所などの社会教育施設が飛

躍的に増加したことが注目される。この時期朝鮮に社会教育が始った理由はいろいろ考えられるが、まず第一の理由は第一次世界大戦後の大正デモクラシーの影響によって社会教育運動が日本で盛んになり、それが朝鮮にも波及したことがあげられる。日本においては、1921年文部省官制の改正により、明治以降の“通俗教育”の呼称を“社会教育”と改称し、1924年普通学務局に社会教育課を設置し、また地方庁にも社会教育主事が置かれることになり、社会教育における行政機構が確立した。⁽⁹⁾朝鮮においては、1921年7月朝鮮総督府内務局に初めて社会課が置かれ、社会事業とならんで社会教育が開始された。

第二の理由は、当局は三・一独立運動の経験によって、単なる学校教育によるだけでなく、社会教育によって「忠良なる国民を育成する」（朝鮮教育令第2条）必要を痛感したことである。特に時代に敏感な青年層に対しては積極的に働きかけ、体制に従順な青年団を育成し、「青年自体の修養と共に、国家社会に対する奉仕の念を養い、地方改良、農山漁村の振興の中堅者又は指導者として活動せしめる」⁽¹⁰⁾策をとったことが推摘できる。

1920年代盛んになったこの社会教育を朝鮮において理論化し、実際の行政の対象としてとり組んだのは松村松盛であった。彼は朝鮮総督府の学務課長、土地改良部長、殖産局長などを歴任した人物であったが、文化政治期初期の教育行政に大きな役割を演じた、また理論家としても秀れており、もっとも体系的な社会教育論を展開した。彼の社会教育論は当時彼が発表した多くの論著によって知りうるが⁽¹¹⁾、その基本となっている思想は行

政的観点の強い社会教育思想であった。

彼はまず、現代においては学校教育以外に社会教育が必要であることを強調する。特に教育機関が不十分で、文盲が多数を占め、文化程度の遅れた朝鮮においては、「世界の大勢を理解せず総督政治に悦服しない者もあり、又動もすれば種々の流言蜚語に迷わされて猜疑不安の中に漂ふて居るような者もある。これらの人々に対しては特に教化の方法を講じなければならぬ。¹²⁾」とその理由を述べる。このように彼は社会教育の必要を、「総督政治に悦服」する朝鮮人の教化に見だし、それを行なう主体は国家、公共団体であるという。そして、社会教育の施設として、社会知育の施設、社会徳育の施設、社会情育の施設、社会体育の施設に分類し、図書館は博物館、動・植物園、展覧会、講演会などとともに社会知育の施設であると言う。松村は多くの社会教育施設をあげその意義を述べているが、特に強調したのは図書館と良書の普及の必要についてであった。彼はいち早く朝鮮教育令公布記念事業の一つとして官立図書館設立を主張したが、これは時宜をえたものであり、のちの朝鮮総督府図書館設立に直接結びつく主張であった。

彼はまた、図書館についてはその意義、歴史、図書館教育の必要性、図書館の設置及び費用負担、図書館の組織、経営、職員養成などその全般について詳述している。¹³⁾彼の図書館論は当時としてはもっと秀れたものの一つであるが、特に図書館教育において師範学校における図書館学教育の必要、小・中学校における図書館利用方法の教育の必要を説いた点、また図書館の設置及び費用負担について、国及公共団体が公費を以て設立、経営す

べきこと、さらに図書館員養成の必要を主張していることは現在からみてもその識見は高く評価されてよいものと思われる。

(2) 官公立図書館運動

(イ) 朝鮮総督府図書館の誕生

1923年11月に創立され、1925年4月に開館した朝鮮総督府図書館は、文字どおり朝鮮の中央図書館として植民地期朝鮮の図書館運動の中で絶大な役割を果たした。この図書館は1930年代に入ってその組織、制度、諸活動の骨格を固めたが、それについては後述することとし、ここでは創立の目的とその歴史的意義について検討してみることにする。

まずこの図書館の創立目的について、『京城日報』（1924年1月15日）は次のように紹介している。

「該館の理想は国立図書館の使命を果すにあるので即ち朝鮮統治の主義方針に基ける思想の善導、教育の普及、産業の振興等に関する新古の参考図書を備付けるのが第一義で、朝鮮民族の文献を蒐集するのが第二義、広義に於ける朝鮮研究に関する和漢洋書を聚積するのが第三義、全鮮に図書館の普及発達を図り其の指導者たることを以て第四義として居るのである。」

また開館直後に発行された『朝鮮総督府図書館要覧 大正十四年七月現在』¹⁴⁾（朝鮮総督府刊）の中でも、ほぼ同趣旨の目的が掲げられている。ここにあげられた4つの目的は、国立図書館の使命としてしごく当然のことであるが、なお植民地の中央図書館として朝鮮民族の文献収集と朝鮮研究に必要な文献の収集を

重視していることが特徴である。実際創立以後、朝鮮関係書の収集には最大限の努力がはらわれた。さらに注目すべきは、第一義の使命として掲げられている“朝鮮統治の主義方針に基ける”参考図書⁹⁷の収集という点である。この点はこの図書館が植民地統治機関の一つであることを如実に示している。

また、ここに“思想の善導”という言葉がでてくるが、この言葉は『朝鮮総督府図書館要覧』では削除されている。しかし、「図書館ハ社会教育上最モ重要ナル機関⁹⁸」であると位置づけられ、朝鮮総督府図書館はその先頭に立つべきものとされていた点から考えてみると、総督府の意図した“社会教育”は「民衆の教化」にあり、その核心が「思想の善導」にあったと言えるであろう。これは言うまでもなく、日本の植民地統治に従順な民衆の育成の役割を図書館が担わされたことを意味した。この点について、総督府図書館の後身である現在の国立中央図書館もその正史である『国立中央図書館史』の中で、“総督府図書館は韓国民族を同化する機関の一つとして設立されたと言っても過言ではない⁹⁹と位置づけていることから明らかであろう。

次に設立経緯について述べる。この図書館が1922年2月「朝鮮新教育令」発布記念事業の一つとして設立が計画されたのは事実であるが、それを可能にしたものは何であったか。それはまず当時盛んになった社会教育に対する世論の要望に応じざるを得なかったことが考えられる。それに行政官僚の中に、松村松盛のような有力な社会教育推進論者が存在したことも考えられる。しかし、その最大の理由は、当時ようやく勃興してきた朝

鮮人による私立大学設立運動や私立図書館設立運動に官側として対抗する必要に迫られたことであった。特に1920年11月に設立された尹益善、李範昇らによる京城図書館¹⁰⁰は、日韓併合以後最初に設立された朝鮮人による近代的公共図書館として朝鮮人社会に大きな影響をあたえていた。この存在は、当然に日本人行政官僚にも影響を及ぼさざるをえなかった。その象徴的な事件が、当時の政務総監水野錬太郎と京城図書館との出会いであった。水野は当時を回顧して次のように述べている。

「大正九年自分が朝鮮総督府政務総監在職中、或る日京城市内を散歩したる際、小さき図書館を見たので中に入って見た。聞けばこれは半島の李範昇君が、種々の書物を蒐集し青年に読ませんが為に計画したものだとのことであった。自分は予てより京城に一の官立図書館の無きことを遺憾として居たのであるが、今李君が独力で微小ながらもかかる図書館を作り又青年が熱心に読書して居る実況を見て感激したのである。そこで自分は予ての希望通り是非京城に立派な図書館を作らなければならぬことを一層強く痛感した。それで総督府の予算に其の費用を計上しようと計画した。¹⁰¹

かくして成立した朝鮮総督府図書館は、朝鮮の図書館運動に一大転期をもたらした。

(ロ) 公立図書館の設立

1920年代の朝鮮の図書館運動を特徴づけるものは、総督府図書館の設立とやらんで主要な公立図書館が大体設立されたことである。もちろんこれらの公立図書館は欧米の図書館から見ると、比較すべくもなく貧弱であったが、まがりなりに

もこの時期朝鮮の図書館は基礎を確立した。

これら公立公共図書館は、府、道、郡、邑（日本の町）によって設立された。これらのうち京城府立図書館と平壤府立図書館をのぞくと、年經常費5千円にもみたぬ貧弱さであった。これら公立図書館は、その設立過程がさまざまである。京城府立鍾路図書館（1926年4月創立、前身は京城図書館）、釜山府立図書館（1901年10月創立、1919年4月府に移管）、木浦図書館（1907年7月設立、1928年6月府に移管）はもともと私立であったものが公立化されたものである。また開城図書館（1924年4月設立）と咸興図書館（1930年10月設立）は、郷校財産によって運営されていた私立図書館が府立化されたものである。また洪城図書館（1922年4月設立、29年に郡に移管）は私立が郡立に、公州図書館（1928年6月設立、最初郷校財産で経営、郡立をへて、1935年邑立に移管）は私立から邑立となった。

公立図書館の中では府立が中心で、道立は忠清北道と全羅北道の二館しか設立されていない。道立図書館については、1930年代の初め京城府立図書館長の大山一夫がその建設を提唱したことがある。これは彼が朝鮮図書館網の建設との関係で提唱したものであるが、要するに各道（全13道）に一館以上の道立図書館を設置し、管内の郡府邑面図書館の普及発達を中心たらしめようとする案であった¹⁰。これは府立図書館設立が中心であった当時の状況では、一歩進んだ建設的意見であったが、朝鮮図書館界では少数意見として終り、また行政当局からも無視されてしまった。

蔵書数からみると、朝鮮總督府図書館、

鉄道図書館、京城府立図書館、釜山府立図書館、平壤府立図書館の5館で、全図書館蔵書約36万冊のうちの約8割を占めていた。（図表(1)「設立者別1932年度図書館一覧表」参照）また図書館経費についても、蔵書数の場合と同じことが言える。このことは、当時の朝鮮の大多数の公共図書館がいかに零細、脆弱な存在であったかを如実に示している。

なお、これら公立図書館は閲覧料を徴収したものと、無料であったものがある。總督府図書館、京城府立、大邱府立、平壤府立、元山府立各図書館など比較的規模の大きな図書館は有料制をとっていた。

(3) 朝鮮人による私立図書館運動

1920年代、朝鮮人による私立図書館運動が全国各地に澎湃として起った。これは三・一独立運動という一大民族運動の高揚に示された朝鮮民衆の政治的エネルギーが、その挫折をへて、20年代に入り文化的要求に転化していった一つの現れであった。

これら朝鮮人による私立図書館運動は、官公立図書館が主として都市に設立されたのにくらべて、その多くが交通不便の農村で展開されていたことに特徴がある。またこれらの図書館は『朝鮮總督府統計年報』に公式に記載されていないが、当時の新聞紙上に多数見いだすことができる。これら図書館の中には、実際の図書館設立に至らず、設立運動だけで終わってしまったものが多数あった。しかし、これら当時の図書館関係記事を丹念に読んでみると、自らの図書館を希求してやまぬ朝鮮民衆の熱烈な思いが伝わ

ってくる。また『東亜日報』などこれら運動を積極的に報道した民族系言論機関の熱意にも大きな感銘をあたえられる。

これら図書館設立運動には、朝鮮人個人によるもの、郷校財産によるもの、学校団体によるもの、青年会によるもの、キリスト教団体によるもの、言論機関によるものなどがあつた。このうちもっとも盛んであつたのは郷校財産による図書館設立運動であり、実際に設立された図書館の数もそれによるものが一番多かつた。

(イ) 朝鮮人個人によって設立された図書館

この種の私立図書館は少数ではあつたが、民族精神の濃厚な篤志家によって設立された。その代表的なものは京城図書館と仁貞図書館であつた。京城図書館は、朝鮮人によって設立された最初の近代公共図書館として、韓国図書館史上に大きな意義を有している。しかしこれについては前稿で述べたので割愛する。

仁貞図書館は、篤実な仏教信者であつた金仁貞(1871—1951)女史が私財を投じて平壤に1931年12月に設立した。本館(三階建)150坪、別館180坪のレンガ造りの近代建築であつた。蔵書数は約8千冊を有した。解放時まで堅実な経営を貫ぬぎ、朝鮮最大の私立図書館であることを誇つた。これは金仁貞女史の豊かな財力に基礎をおいた財団法人経営と、鄭斗鉉、張在俊など秀れた図書館人を館長にいただいていたことによって可能であつた。この図書館は創立時、“朝鮮図書館運動の烽火”⁽²⁾として朝鮮民衆に迎えられ、以後順調な発展をたどつた。

鎮南浦図書館は、平安南道鎮南浦の有名な労働運動家であつた姜俊植の遺志を

ついでその子姜偉情によって、労働者のための生活改善運動の一環として1924年9月に設立された⁽²⁾。

白善行女史記念館は、1928年10月に白善行女史の私財によって平壤に建設され、その中に公会堂と図書館が設けられた⁽²⁾。

金剛図書館は、社会事業家尹声烈によって金剛山探勝客のために江原道高城郡温井里に1927年10月設立された⁽²⁾。

(ロ) 郷校財産によって設立された図書館

日本統治時代、朝鮮人によって設立された図書館のうち大多数は郷校財産(郷校に帰属する郷校田などの財産。地方の儒者階級によって管理された)によるものであつた。それらを地域別にあげてみると次のとおりである。()内は設立年を示す。

京畿道：開城図書館(1924.4)、安城図書館(1932.6)

忠清南道：公州図書館(1928.6)、洪城簡易図書館(1922.9)

全羅南道：潭陽郡図書館(1924.10) 谷城図書館閲覧所(1925.9)

慶尚北道：慶山図書館(1929.3)

慶尚南道：咸安簡易図書館(1923.9)

密陽図書館(1925.6) 梁山郡簡易図書館

(1932.4) 蔚山郡簡易図書館

(1923.2) 東萊簡易図書館(1923.

8) 御大礼記念固城簡易図書館

(1928.5) 南海簡易図書館(1926.

7) 山清図書館(1926.7)

黄海道：沙理院図書館(1925.2)

平安北道：泰川郡(1924.4)、熙川郡

(1923.6)、寧辺郡(1924.4)、博

川郡(1924.4)、鉄山郡(1924.5)、

楚山郡(1924.4)、慈城郡(1924.10)、

厚昌郡(1925.9), 昌城郡(1933.9)の各新聞図書閲覧所, 宣川会館図書縦覧所(1935.1)

江原道: 三陟図書館(1923.2) 襄陽図書館(1929.5)

なおこのほか, 設立に至ったかどうか不明であるが, 設立運動のあったものとして尚州図書館²⁴⁾, 定州簡易図書館²⁵⁾, 金提図書館²⁶⁾, 信川図書館²⁷⁾, 通川図書館²⁸⁾などが確認できる。

これら郷校財産を利用して設立された図書館は, 大部分地方の農村につくられ, 蔵書数千冊にも満たぬ零細なものが多かった。しかし, これら図書館は明確に地方文化向上, 朝鮮民衆の啓発を理念に掲げて設立されたものが多かった²⁹⁾。

(イ) 青年会による図書館設立

1920年代に入ると朝鮮各地に朝鮮人青年団体が生まれ, 各種の文化教育運動が展開された。図書館設立はこれら青年団体が力をいれて取組んだ運動の一つであったが, 実際の図書館設立にこぎつけたものは少なかったようだ。しかし, 彼らの運動の中にはほとぼる民族精神が現れていた。

1924年には, 釜山草梁洞朝光会によって“将来朝鮮の文化を進興させる³⁰⁾”ことを目的に朝光図書館設立運動が起った。

1925年には, 咸鏡南道の新高山青年会によって“民衆教養の目的³¹⁾”で新高山図書室, 元山新人同盟による“元山青少年の智識を普及させる³²⁾”目的で元山図書館設立運動があった。またこの年には水原懿法青年会³³⁾, 金陵青年会³⁴⁾, 咸鏡北道青年団連合会³⁵⁾などによる図書館設立運動もあった。

1926年には, 昌原青年会³⁶⁾, 黄州青年会³⁷⁾, 星州青年会³⁸⁾, 鎮海青年会³⁹⁾などによ

る図書館設立運動があった。

1927年には, 固城青年会, 居昌青年会, 淳昌青年同盟⁴⁰⁾などによる図書館設立運動があった。このうち固城青年会(慶尚南道)は“青少年に対する唯一の指導機関として, また科学の研究により社会に多くの闘士を出すために”⁴¹⁾運動にたちあがり, 居昌青年会(慶尚南道)は“農民の文盲退治と一般の自由教育と個人の知識啓発”⁴²⁾のため図書館設立運動を展開した。

(ロ) 学校団体による私立図書館設立

学校の教職員や卒業生で結成した学校関係団体による図書館設立運動もこの時代に起った。これらは最初学校図書館を設立する目的で始まったが, しだいにその対象を一般大衆に拡大した。

歙合簡易図書館⁴³⁾は, 江原道通川郡の歙合普通学校卒業生が発起し, 文化の遅れたこの地方に図書館を設立しようとしたものであった。

江陵図書館⁴⁴⁾は, 江原道江陵の江陵公立普通学校同窓会によって起こされた設立運動であった。

龍岡図書館⁴⁵⁾は, 平安南道龍岡郡の広梁港公立普通学校が休学期間中に卒業生と一般大衆に公開する目的で設立しようとした図書館であった。

(ハ) 言論機関による図書館設立

日本統治下で朝鮮人によって経営された言論機関は, 民族運動の指導的役割をはたしたが, なかでも東亜日報社は各地の支局に図書室を設置して, 一般人にも自由に利用させた。これらの中では, 東亜日報社の金泉支局(慶尚北道)⁴⁶⁾, 固城支局(慶尚南道)の図書室が知られている。東亜日報社は固城支局図書室設立の目的を次のように述べている。

「本報読者諸氏の慰勞と一般社会の文盲退治、その他種々の深大な意味をもって本報支局文庫を設置した。⁽⁴⁷⁾」

(ノ) キリスト教団体による図書館設立
韓国の近代化に大きな役割をはたしたキリスト教団体は、近代図書館運動にも若干の貢献をした。

義州基督教青年会は、その地方に図書館がないのを遺憾として、図書700冊を準備して図書館を設立した⁽⁴⁸⁾。

平壤トマス牧師記念図書館は、殉死したトマス牧師を記念して、キリスト教図書を収集して設立された⁽⁴⁹⁾。

原州呂基督教会図書室は、1939年4月同教会の羅愛施德夫人が自費を投じて無料公開したものであった⁽⁵⁰⁾。

3 文化政治期後期(1931—1937)

(1) 社会教育行政の強化と宇垣総督の図書館論

1931年9月「満州事変」が勃発し、朝鮮は中国大陸への前進基地、兵站基地と位置づけられ、日本の戦争政策にまきこまれていった。日本においては“国体観念の明徴”と“国民精神の作興”を前面に掲げる「教化総動員運動」が展開されたが、植民地朝鮮においてはそれは経済政策と結びついて「農山漁村振興運動」「自力更生運動」という形で推進された。これは社会教育行政の強化と結びついて、各種のいわゆる「社会教化事業」が実施された。朝鮮総督府は、1930年代学校教育における「一面一校」制をいちおう達成したが、同時に成人社会教育に力をいれた。宇垣総督は1932年度追加予算に特に社会教化事業費を計上し、次の事

業を実施した。即ち、巡回講演、巡回映画の実施、パンフレット(社会教化資料)の配布、模範部落に対する補助、婦人教養施設(婦人会、母姉会など)の奨励、郷約事業の奨励、体育運動の奨励、青年団体の指導統制、色服及び断髪奨励、時間尊重運動、図書館の振興、儀礼準則の発布などであった⁽⁵¹⁾。

また宇垣総督は、1934年11月総督府定例局長会議の席上、「図書館を社会教育の道場として現に総督府において拍車をかけている精神作興運動に活用するよう指導して欲しい⁽⁵²⁾」と指示した。これは図書館を日本精神宣伝の場に利用しようとする意図の現れであった。また宇垣は、1935年10月京城で開催された第29回全国図書館大会の席上で、彼の図書館思想を卒直に表明した。宇垣は図書館の二大使命として、図書館が“思想の観測所”であること、図書館が良書選定の役割を担うべきことを強調した⁽⁵³⁾。この発言は、植民地期朝鮮における為政者の図書館に対する思想をもっとも象徴的に表現したものであった。当時日本においても、図書館の本質的機能をめぐり、1933年6月の「改正図書館令」の公布を機に多くの議論が展開されていた⁽⁵⁴⁾。それは論者によって重点のおきどころは異なるが、図書館の図書収集、閲覧機能、公衆の教養増進機能、調査研究機能及び社会教育機能を強調するものであった。また「改正図書館令」による中央図書館制度の確立によって、しだいに図書館に対する国家統制が強化されつつあったが、図書館をして“思想の観測所”たれと主張した意見は見当らない。この宇垣の見解ほど露骨に図書館を思想統制機関として位置づけようとしたものは他になかったと言えよう。宇

垣は「図書館を通じて、社会の思想の流れ、その動きの前途を予測して見たい」と述べ、そのために「京城では総督府図書館長の方に命じて、図書館で読まれている書物の種類は如何なるものか、終始変遷し変化しているか、その点の報告を時々頂いて、狭い京城の空気は今どういう風に動いているかといふことを承知して致しているのでありますが、そういうことを全国的に致して、それを総合してみたい⁶⁵⁾」と強い希望を述べている。ここには個人の読書の自由に対する一片の配慮も見られず、朝鮮の全図書館を思想統制機関に組込んでしまおうとする恐ろしい思想が表明されていた。これに対し館界は、「(宇垣総督が) 図書館をして思想の観測所たしめよと諭されたことは一同の等しく感激措く能はざるところであった⁶⁶⁾」と受けとめ、進んで迎合する態度を示した。それは大会における朝鮮総督諮問に対する答申案中に、「常ニ読書ノ傾向ニ留意シ国民ノ思想善導ニカマルコト」及び「良書ノ蒐集紹介ニカメ設備ノ充実完成ヲ期シ一層其ノ機能ヲ發揮セシムルコト⁶⁷⁾」を掲げ、宇垣の要望に直接応じたことから察せられる。

(2) 第29回全国図書館大会

1935年10月8日から10日にかけて京城帝国大学を会場に開催された第29回全国図書館大会は、朝鮮図書館運動にとって画期的事件であった。これはまた日本図書館協会にとっても、1920年大連及び奉天で開催した第15回全国図書館大会(いわゆる「満鮮大会」)に次ぐ海外大会であった。全参加者は186名にのぼったが、このうち朝鮮からの参加者は95%(日本人

73名、朝鮮人22名)であった。朝鮮においてこれほど多くの図書館人が一堂に会したことはかつてなかったし、またこれほど広範多岐にわたり朝鮮図書館界の問題が討議されたこともかつてなかった。

この大会が朝鮮図書館運動にもつ意義はいろいろ考えられるが、まず第一は、主催者たちがこの大会を朝鮮図書館運動発展の一大契機にしようとした点である。この点について、主催者の一人であった朝鮮総督府図書館長荻山秀雄⁶⁸⁾は次のように述べている。

「朝鮮の幼稚なる図書館界を振興せしむべき手段方法は数多くあるであろうが、その最も効果的なものの一つは全国図書館大会を京城に誘致することである。由来文化事業には国境なしとの諺さへあるが、内鮮の図書館はほとんど没交渉といっても差支ない程の隔りであり何等の聯繫もなかった。我等は内外地の権威者を迎へ図書館思想の啓培をはかると共に胸襟を開いて振興の対策を講じ、以て朝鮮の館界は内地の延長であるてふ時代の一日も速からむことを熱望していた。⁶⁹⁾」

この大会には、当時の日本の館界の多くの指導者が参加し、また朝鮮総督府からも図書館行政の担当者が招かれ、朝鮮図書館の振興策を協議したことは、それ自体後進の朝鮮図書館界に大きなインパクトを与えたものと思われる。

第二は、この大会において討議された図書館振興策の内容についてである。大会は文部大臣諮問(「現時ノ情勢ニ鑑ミ我国図書館事業一般ノ進展ヲ図ルヘキ方策如何」)と朝鮮総督諮問(「朝鮮ノ図書館ヲシテ一層発展セシムベキ方策如何」)を討議し、答申案を提出した。総督府諮問

の討議の過程では、朝鮮における図書館令の制定と社会教育専任指導官設置をめぐって図書館側と総督府側の鋭い意見の対立があった。図書館側は、図書館令又は規則の制定によって、図書館の設置、運営の基準、司書の資格を明確化し、あわせて財政的援助を期待したが、当局は法令発布は時機尚早とし、むしろ図書館の普及発達を図る方が先決問題と主張した。また社会教育専任指導官設置要求に対しては、当局は財政難を理由にしてとりあわなかった⁶⁰⁾。

また討議の過程で、間宮不二雄（間宮商店店主）より答申案に「府郡島邑面立図書館ニ国語教育ニ適スル係員ヲ置キ文盲者ヲ指導教育セシムルコト」という一項を付け加えるべしという要求があった。これは“文盲者”が全朝鮮人の七割を占める現実に着眼して提案された注目すべき意見であった。彼はその具体的方法として、「図書館の閲覧室を開放して、その館が文盲者を集めて、国語教育者がいて、図書館事業の邪魔にならない時間に国語を教える。又各地に出張して、或は学校その他を利用して、図書館員の中、国語教育者が出て行って教へる⁶¹⁾。」ことを提案した。この案は参加者大多数の賛成を得、答申案に付加された。かくして最終的に朝鮮総督諮問に対する答申案に盛り込まれた事項は次のとおりであった。

(甲) 当局ノ施設ニ俟ツベキ事項

- 一、図書館規則ヲ制定シ道府郡邑面ニ於ケル図書館網ノ統制ヲ期スルコト
- 一、国費及地方費ヨリ図書館費補助ノ方法ヲ講ジ其ノ普及発達ヲ促進セシムルコト
- 一、優良図書館並ニ功績アル図書館員

ニ対スル選奨規程ヲ定メ斯業ノ振作向上ニ資スルコト

- 一、社会教育専任ノ指導官ヲ設置シ図書館ノ指導監督ノ任ニ当ラシムルコト

一、毎年図書館ニ関スル講習会ヲ開催シ図書館員ノ教養指導ニカマルコト

- 一、府郡島邑面立図書館ニ国語教育ニ適スル係員ヲ置キ文盲者ヲ指導教育セシムルコト

(乙) 図書館ノ努力ニ俟ツベキ事項

- 一、良書ノ蒐集紹介ニカメ設備ノ充実完成ヲ期シ一層其ノ機能ヲ發揮セシムルコト

一、常ニ読書ノ傾向ニ留意シ国民ノ思想善導ニカマルコト

- 一、図書館利用ノ手続ヲ簡易ニシ公衆ヲシテ一層図書館ニ親シマシムルコト

一、学校青年団婦人会其他各種団体トノ連繫保持ニカメ図書館ノ利用増進ヲ図ルコト

- 一、一般社会ニ対シ図書館事業ニ関スル理解ヲ深カラシメ図書館ノ利用価値ヲ周知セシムルコト

一、図書館相互ノ連絡ヲ密接ニシ協力スル業ノ向上進展ヲ期スルコト

第三にこの大会のもつ意義は、図書館界だけでなく、朝鮮総督府の側にも存在した。それはこの大会が開かれた年がちょうど総督府始政25周年にあたったことである。総督府は内外から参加した第一線の図書館人達に“新興朝鮮”の発展諸相を見物させ、総督府の施政の正当性を主張する絶好のチャンスとした。宇垣総督は自ら大会に参列し、自己の図書館論を開陳した。このような総督府の意図は、大会参加者に受容され、一定の成

果をおさめたとと言えるであろう。

(3) 農村図書館設立運動

1930年代の図書館運動で注目すべきいま一つのことは、農村図書館(農村文庫)設立運動である。この運動は当時当局が強力に推進していた農山漁村振興運動に触発されて起った面がある。またこれまでも農村に図書館を設立しようとしたり、設立された場合もあるが、今回の農村図書館運動は農村振興という経済的目的と強く結びついていた点に大きな特徴があった。同時に、“文盲退治”という教育面を重視した図書館運動であった点に特徴がある。これは、朝鮮人図書館人と農村青年が結びついた運動でもあった。

当時朝鮮の全人口約二千万人のうち農民は約7割を占め、そのうちの8割(230万戸)は小作農で、文字どおり塗炭の窮状に陥っていた。高率の小作料、食糧の絶対的不足、累積する負債に苦しむ困窮農家の救済が、当時の施政における最大課題であった。この朝鮮農村の窮状と全人口の7割を占める文盲の存在について、朝鮮の図書館人達はつよく意識せざるを得なかった。

この農村図書館運動の指導者は、李在郁(朝鮮総督府図書館嘱託)と姜辰国(京城府立図書館司書、朝鮮図書館研究会理事)であった。

李在郁は『農村図書館の経営法』⁶²⁾を著し、農村図書館が「朝鮮農村の基礎工作である」こと、これは現下朝鮮にあって絶対的必要性と緊急性をもっていることを強調した。そして農村図書館経営の要訣として、まず第一は各々の農村の実情についての充分な調査研究をして、その

農村に適合した規模の図書館を考え、その農村に必要な図書を選択備置すること、第二は農村図書館の対象が常に純朴なる農村大衆であることを考慮すること、第三は館員の読書修養の必要と農村啓蒙に献身する決心の必要を説いた。そして、具体的な経営実務として、図書館の建築、設備、用具、図書の蒐集、選択、整理、さらに閲覧事務、統計、経理等について詳細に論じた。彼のこの本は農村図書館経営の実務書として当時かなりの影響をあたえた。

さらに姜辰国⁶³⁾は、農村図書館運動の理論をより体系化、理念化した形で展開した。彼は次のように言う。

「全朝鮮の農山漁村部落に農村文庫を建設網羅して、常設恒久的な文盲打破運動と共に、疲弊し切った農民への経済的救助策としての農村開発運動を進めることにある。即ち、農具の共同利用機関、農民の消費組合機関、農山漁村の職業指導機関等の如き附帯事業を併った農村文庫を中心に、凡ての農村運動をなすにある。⁶⁴⁾」

彼の理論によると、農村図書館はあらゆる社会的、文化的施設、機関(学校、博物館、美術館、科学館、病院、印刷所、工場、農園、職業指導所など)の中心で、それに奉仕するものであり、その図書館の内部には農村の生活、経済に密着した図書は勿論、“文盲打破教場”を附設し、あわせて“農村消費組合”、“農具利用組合”なども併設すべきものだという。このような姜辰国の農村図書館論は、農村の現実問題と図書館設立運動を結合しようとした点では評価しうるものであるが、あまりにもその理論は理想的にすぎ、後進の朝鮮農村の中では実現はほとんど

不可能なものであった。ただ彼が当時の新聞、雑誌を通して主張した農村図書館設立の必要論は、各界各層の目を図書館に向けさせるのに大きな役割をはたし、また農村青年をして実際の農村文庫設立運動に駆りたてたことも確かである。しかし、それらの運動が実際の農村図書館設立に結びついたものは少なく、確認できるものは以下のものにすぎなかった⁶⁵⁾。

抱川農村文庫(京畿道抱川郡蘇岐面松陽里)、山幕農村文庫(京畿道長湍江上面九化里)、竹林農村文庫(全羅北道高敞郡茂長面竹林里)、會睦農村文庫(咸鏡南道高原郡上山面會睦里)、文発農村文庫(平安南道大同郡古平面文発里)、磨星更生文庫(平安北道宣川郡深川面磨星洞)、秀松農村文庫(平安北道龍川郡揚下面秀松洞)

4 戦時期(1938—1945)

(1) 戦時下の図書館と朝鮮総督府図書館の役割

1937年7月蘆溝橋事件が起こり、日中戦争が始まった。朝鮮は大陸前進兵站基地として、日本の戦争体制に組みこまれた。日本国内の国民精神総動員運動は朝鮮にも波及し、朝鮮内にも「国民精神総動員朝鮮連盟」が結成され、朝鮮民衆に対する“皇民化政策”もより一層強化された。南次郎第七代朝鮮総督は“国体明徴、鮮満一如、教学振作、農工併進、庶政刷新”の五大政綱を発表し、朝鮮の植民地化をより一層おし進めた。また1938年には第三次の、1943年には第四次の改正教育令が公布され、朝鮮人生徒に対する皇民化教育が強化された。1939年には

朝鮮語新聞、雑誌の発行が禁止され、民族文化の抹殺が図られた。1940年には志願兵制度、「創氏改名」制が朝鮮人に施行され、朝鮮人の戦争体制への本格的編入が開始された。

このような状況下で、図書館は“不要不急”の事業として行政から冷遇され⁶⁶⁾、社会一般からも軽視された。事実1932年に52館とピークに達した図書館も、その後だいに減少傾向をしめし、1943年には42館に減少した。(図表(2)「年度別公共図書館統計」参照)とくに私立図書館は公立化されたり、廃館したりして、戦争末期には10数館にまでおちこんだ。

また残った図書館も社会教育行政の対象として、1936年以降は総督府学務局社会教育課教化係の所管とされた。図書館は国民精神作興、思想善導、生活改善、青年訓練、婦人教養、啓蒙教化、修学院運営などとならんで社会教化事項の一つとされた⁶⁷⁾。しかし、当時図書館は行政対象とはされたが、当局からの援助をほとんど受けることはなかった。

ところで、このような情勢に戦時下の図書館はどう対処したか。それには二つの面があったが、一つには大勢に順応し、時の政策に積極的に加担していった側面であり、いま一つは図書館人自らの努力により苦境を開開せんとした側面である。

前者の側面できりあげるべき第一は、図書館界の一部であるが国民精神総動員運動に加担したことである。この運動は“高度国防国家体制の確立”を最高目標として、国民思想の統一、国民総訓練、生産力拡充のため全社会勢力を結集しようとするものであった。朝鮮総督府図書館は朝鮮の中央図書館として卒先この運

動に参加し、「国民総力朝鮮総督府図書館連盟⁶⁸⁾」を結成し、館内機構を改革し、戦争体制に呼応した。たとえば「国民精神総動員強調週間⁶⁹⁾」とか、「国民精神総動員銃後報国強調週間⁷⁰⁾」を設けてその宣伝に努めたり、また日常行事としても「朝鮮神宮遙拝及参拝」「皇国臣民の誓詞斉唱」「決戦勤務実行誓詞斉唱」などを行ない館員の思想統一を図ろうとした。またこの図書館は戦争末期になると、「文国殿感謝祭⁷¹⁾」と称し、先輩館員の名前を「文国殿」に祭り、朝夕礼拝したり、「図書祭⁷²⁾」と称し、前年度一番多く読まれた図書を奉納し、館員に礼拝させたりして、今から見ると異常な情況に陥っていった。

次に指摘すべきことは、閲覧可能図書を制限し、読書の自由を奪ったことである。これは朝鮮内発売禁止図書（総督府警務局によって指定された）はもちろん、自由主義的、英米思想的図書にも及んだ。朝鮮総督府図書館司書向井謙三は「職域の反省⁷³⁾」という論文の中で、「米英思想反映の図書を如何に控除すべきか、米英式図書館事業経営法の批判、これに対する日本独自のものの創成如何」と問題提起した。総督府図書館では、自らこのような図書を選定し、閲覧カードから除去したり、新規に受入れたその類の図書は別置き閲覧禁止処分にした。このような自己規制によって、戦時下の図書館はしだいに公共図書館としての存立基盤を喪失していった。

しかし、このような厳しい状況の中でも、一部の図書館人によって図書館振興の努力は絶ゆみなく続けられていた。

その中でも第一にあげられるべきは、朝鮮総督府図書館によって立案、計画さ

れた「全鮮府私立図書館振興計画」である。それはこの運動の指導者であった荻山秀雄によると、「図書館は産業の振興、資源開発の根本資料を提供するために、将又一般社会人の思想善導の中心となるために、重要不可欠の文化機関たること⁷⁴⁾」を目的にして、「皇紀二千六百年」（1940年にあたる）の記念事業の一つとして計画された。この計画を実現するため、五ヶ年計画で全朝鮮の府、私立図書館の予算を増額させ、基本的良書の備付け、巡回文庫の拡充、図書館用品の規格統一、図書館員講習会開催、官庁刊行物の円滑なる配布などの事業を行なおうとした。この実現のため、総督府図書館では館長をはじめ幹部職員を各地に派遣し、行政当局に協力を働きかけた。しかし、各地方の行政当局もそれに対し口では協力を約しながらも、戦時下の財政逼迫のため実際の援助はほとんど行なおうとしなかった。

戦時下の図書館として評価しえるいま一つのこと、若干の図書館が新設されたことである。たとえば府立図書館として全州府立図書館⁷⁵⁾（1939年2月）、大田府立図書館⁷⁶⁾（1940年4月）が設立されたことは、当時の地方当局の財政難を考えると大いに評価しうることであった。総督府図書館もこれら図書館の設立に最大限の協力を惜しまなかった。

また朝鮮人による図書館設立も数館あったことは、朝鮮人の図書館運動に対する情熱が決って衰えていなかったことを示している。それらには安州の中軒文庫（1939年）、南原図書文庫（1939年）、水原図書館（1940年）、開城の中京文庫（1942年）があった。なかでも中京文庫⁷⁷⁾は、開城の富豪金正浩氏が私財を投じ

て設立したもので、蔵書1万1千冊を有し、平壤の仁貞図書館とならぶ私立図書館の範となることを期待されたが、開館に至らないうちに朝鮮解放の日を迎えた。

さらに朴奉石⁷⁰⁾による「朝鮮公共図書館図書分類表私案⁷¹⁾」(1940年)の発表は、朝鮮図書館運動に対する偉大な貢献であった。これは朝鮮人自らによる最初の図書分類表であったし、解放後の彼の「朝鮮十進分類表」の先駆をなす業績であった。

(2) 朝鮮図書館連盟の結成

1939年4月、朝鮮図書館連盟が結成された。創立総会には総督府図書館と鉄道図書館の両官立図書館及び京城、仁川、開城、全州、木浦、大邱、釜山、平壤、新義州、元山、咸興、清津の各府立図書館それに私立から仁貞図書館の全15館が参加した。これは全朝鮮の主要官公立図書館はすべて網羅していたが、私立図書館の参加がほとんどなく、また学校図書館も含んでいなかったことで組織上問題があった。総会は理事長に総督府図書館長荻山秀雄を選出し、「朝鮮図書館連盟規約」、「朝鮮図書館連盟協力経費申合」、「朝鮮図書館連盟機関誌発行要綱」⁷²⁾を決定した。

連盟規約第一条は、「本連盟ハ朝鮮図書館連盟ト称シ朝鮮ニオケル図書館相互ノ聯絡提携ニヨリ斯界ノ向上発展ヲ計ルヲ以テ目的トス」と宣言し、この連盟が図書館振興の運動団体であることを明らかにしている。この団体は植民地期朝鮮における最初の図書館運動団体であった。これまでも朝鮮に図書館関係団体がなか

ったわけではない。たとえば朝鮮図書館研究会⁷³⁾などがあったが、これらは純然たる図書館問題の研究会にすぎず、運動体としては朝鮮図書館連盟が最初であった。

この団体が結成された理由としては、当時の国民精神総動員運動に呼応して朝鮮図書館界の結集を図り時局に対処しようとしたこと、さらに第29回全国図書館大会でとりあげられた図書館界の多くの課題に取り組むためにも自らの結集を図る必要があったことが考えられる。

連盟は、具体的事業として次のことをとりあげた。

1. 図書館運営に関する調査及び改善の促進
2. 図書及び図書館用具の購入斡旋
3. 図書の相互貸借に関する斡旋
4. 図書標準目録及び機関誌類の発行
5. 図書館講習会の開催
6. 研究会展覧会講演会等の開催
7. 其の他必要と認むる事項

これらを見ると、すべて当時の朝鮮図書館界の切実な要求であった。しかし、その後のこの連盟の活動をみると、「朝鮮に於ける公共図書館運動史上画期的事業である⁷⁴⁾」と自己宣伝して発足したわりには成果があまりあがらなかった。実行されたものは、機関誌『文化源泉良書』(1939年5月創刊、月刊)の発行と、図書館講習会(1939年8月、1940年8月、1942年3月の三回)開催にすぎなかった。結果的にみてこの運動は、当事者達の熱意にもかかわらず空回りに終り、朝鮮図書館界全体の充実発展にそれほど結びつかず、その後進性、脆弱性を救済するものとはならなかった。

図表 (1)

設立者別 1932年度図書館一覽表

種別	館名	設立者	所在地	図書冊数		開館日数	閲覧人数	支出額 (円)	
				和漢書	洋書			經常費	臨時
官立	朝鮮總督府図書館	總督府	京畿道京城府	121,860	7,998	345	260,555	67,247	68
"	鐵道図書館	鐵道局	"	82,681	8,826	324	106,149	—	—
公立	全北文庫	全羅北道	全北 全州郡	3,091	13	305	3,448	540	—
"	京城府図書館	京城府	京畿道京城府	33,732	1,360	290	219,760	28,742	—
"	同鐘路分館	"	"	17,213	656	294	140,596	—	—
"	仁川図書館	仁川府	仁川府	5,740	50	293	13,789	2,626	—
"	群山図書館	群山府	全北 群山府	7,629	21	185	4,312	2,554	3,262
"	木浦図書館	木浦府	全南 木浦府	4,086	162	293	24,108	1,539	300
"	大邱府図書館	大邱府	慶北 大邱府	9,737	266	289	5,154	4,830	—
"	釜山府図書館	釜山府	慶南 釜山府	11,977	496	288	21,063	2,621	—
"	馬山府図書館	馬山府	" 馬山府	4,219	34	290	3,257	765	—
"	平壤府図書館	平壤府	平壤府	13,433	399	283	85,755	17,312	256
"	鎮南浦府図書館	鎮南浦府	" 鎮南浦府	1,272	5	116	535	483	—
"	咸興府図書館	咸興府	咸南 咸興府	1,607	75	289	29,719	2,063	—
"	元山府図書館	元山府	" 元山府	2,042	25	276	1,824	323	—
"	清津府図書館	清津府	咸北 清津府	145	1	365	114	100	—
"	清州図書館	清州邑	忠北 清州郡	3,113	10	282	10,804	758	—
"	光州邑図書館	光州邑	全南 光州郡	2,927	9	296	19,066	1,521	—
"	御成婚記念 海州図書館	海州邑	黄海道海州郡	940	—	303	182	200	—
私立	尋常小学校構内 安城図書館	公立尋常 小学校	京畿道安城郡	578	15	250	50	—	—
"	烏致院図書館	福永喜八	忠南 燕枝郡	1,744	—	276	500	—	—
"	金堤教育會 城山図書館	金堤 教育會	全北 金堤郡	3,091	13	305	3,448	—	—
"	順天図書館	樋口正毅	全南 順天郡	568	—	120	45	—	—
"	靈巖文庫	佐佐木仙 助	" 靈巖郡	400	—	180	30	—	—
"	福壽会恩賜記念文庫	福壽会	慶南 馬山府	1,450	250	302	8,500	370	—
"	仁貞図書館	金仁貞	平南 平壤府	4,981	51	295	52,324	4,827	—
"	簡易図書館	新義州府 教育會	平北新義州府	2,303	2	353	7,763	300	—
"	淮陽図書館	淮陽 繁榮會	江原道淮陽郡	258	—	347	3,461	—	—
"	郷校財産による 図書館 (24)	—	—	—	—	—	—	—	—
計	—	—	—	19,358	260	5,912	47,879	6,485	200
總計	52館	—	—	359,454	20,999	13,806	1,071,053	146,206	4,086

朝鮮總督府『統計年報』

【参考付表 1】

日本及び植民地における図書館数・蔵書冊数・経費 (昭和十一年度予算)

日本道 府県	館数			蔵書数			予算総額		
	公	立	私	公	立	私	公	立	私
總計	3,240	1,369	4,609	7,687,012	3,631,906	11,318,918	1,636,835	691,617	2,328,452
朝鮮	(官公立) 19	25	44	(官公立) 445,429	33,263	478,692	250,933	16,323	267,256
台湾	(") 78	5	83	(") 312,909	7,695	320,604	220,640	3,761	224,401
樺太	—	2	2	—	11,139	11,139	—	6,900	6,900
関東州	(官立) 1	8	9	5,094	257,596	262,690	18,842	97,678	116,520

【全国図書館ニ関スル調査 昭和十一年四月現在】 文部省社会教育局

図表(2)

年度別公共図書館統計

年度	館数	蔵書総数	東 書	西 書	閲覧者数	設立別館数
1901	1					私 1
1902	1					私 1
1903	1					私 1
1904	1					私 1
1905	1					私 1
1906	1					私 1
1907	2					私 2
1908	3	4,242	2,414	1,828	517	私 3
1909	4	8,333	6,379	1,954	2,284	私 4
1910	3	9,582	7,239	2,343	3,335	私 3
1911						
1912						
1913	4	24,420	23,695	725	16,453	私 4
1914	10	27,492	26,686	806	20,708	私10
1915	15	32,780	31,890	890	27,425	私15
1916	15	35,322	34,374	948	31,274	私15
1917	16	37,138	36,258	880	46,624	私16
1918	16	40,514	36,430	1,084	22,066	公 2 私14
1919	21	45,803	44,359	1,444	28,496	公 5 私16
1920	18	60,441	58,301	2,140	56,282	公 5 私13
1921	19	54,148	51,958	2,190	88,405	公 6 私13
1922	24	88,355	86,853	1,502	190,168	公11 私13
1923	23	98,723	96,398	2,325	229,350	公 9 私14
1924	30	183,981	174,710	9,271	310,596	官 1 公13 私16
1925	36	137,710	129,856	7,854	400,165	官 1 公16 私19
1926	42	160,883	152,243	8,640	481,638	官 1 公26 私15
1927	45	177,563	168,304	9,259	533,331	官 1 公10 私34
1928	46	286,682	270,601	16,081	760,204	官 2 公14 私30
1929	49	285,150	267,124	18,026	746,533	官 2 公17 私30
1930	48	315,244	295,927	19,317	731,337	官 2 公16 私30
1931	50	352,854	331,958	20,376	798,376	官 2 公21 私26
1932	52	380,433	359,454	20,979	1,071,053	官 2 公15 私35
1933	51	407,976	385,651	22,325	1,230,397	官 2 公17 私32
1934	49	440,080	417,198	22,882	1,336,945	官 2 公17 私30
1935	46	501,098	477,897	23,201	1,449,587	官 2 公17 私27
1936	46	543,960	519,661	24,299	1,541,390	官 2 公17 私27
1937	44	582,484	560,884	21,600	1,565,442	官 2 公18 私24
1938	43	625,494	601,573	23,921	1,676,899	
1939	44	681,237	651,776	29,461	1,835,929	
1940	42	732,993	702,187	30,806	1,789,966	
1941	42	777,789	744,212	33,577	1,899,789	
1942	43	823,966	788,726	35,240	1,867,634	
1943	42	860,127	823,305	36,822	1,593,149	官 2 公私40
1944		—	—	—	—	
1945		—	—	—	—	

朴 熙永「近世韓国公共図書館史抄 1901-1945」『図協月報』4巻5号：1963年6月

II 日本統治下の学校図書館運動

1. 京城帝国大学図書館

日本統治下朝鮮における唯一の大学であった京城帝国大学は、1924年5月公布された「京城帝国大学官制」によってその設立をみた。法文学部と医学部が置かれたが、実際の授業は1926年5月に開始された。この大学の開学は当時の施政の根本方針であった“文化政治”のシンボルとしての意味もあったが、その設立の根本目的は朝鮮における植民地教育政策の遂行に奉仕する最高の学術研究機関の樹立にあった。すなわち日本内の他の帝国大学と違って、この大学には特殊の使命が付与された。それは平井三男「京城帝国大学の規模組織と其の特色⁽⁸⁾」によると、「内地・朝鮮・支那の三者の相関的研究は我が帝国の文化を闡明する上に於て極めて重要な」ゆえに、法文学部においては朝鮮の法律制度、経済、言語、文学、思想、信仰、風俗、習慣、美術、歴史等を研究することを重要な任務の一面とし、また医学部においては朝鮮特殊の疾病、薬物等の研究をするを使命としたと言う。したがって大学内の機構もカリキュラムも、この目的に適合するように慎重に編成された。京城帝国大学附属図書館も、以上の目的に奉仕する中枢的な資料提供機関の役割をになわされた。図書館は1927年8月、新建築が竣工した。また1937年9月には、医学部図書室が別途設けられた。

(1) 機構と職員

図書館の上部機関として「京城帝国大

学附属図書館商議会⁽⁹⁾が置かれた。これは総長の諮問機関であり、図書館運営の最高の審議機関でもあった。これは他の帝国大学における制度を参考にしたものだが、この会における図書館長の権限は極めて小さかった。

図書館には、館長、司書官(1名)、書記(1名)、司書(創立時2名、1933年以後5名)、嘱託(創立時2名、のち4ないし5名)が置かれた。ここで注目すべきは館長資格であるが、これは大学官制第13条に「図書館には図書館長をおき教授、助教授、または司書官をあて朝鮮総督がこれを補す⁽¹⁰⁾」とあり、現在の大学図書館事務長にあたる司書官にも館長への道が開かれていたことである。同時に朝鮮総督の権限が図書館長人事にまで及んでいたことが知られる。係として、庶務係、受入係、目録係、函架係、貸出係、書庫係がおかれた。

(2) 蔵書

この図書館は、植民地期朝鮮で最大かつ最良の蔵書を有した。解放直前には蔵書総数が約55万冊に達した。設立後20年間しか経過していないことを考えると、いかに当局がこの図書館の充実に力をいれたかが知られる。この図書館の蔵書内容⁽¹¹⁾は、法学、経済学関係の社会科学図書と歴史、語文学を中心とした人文科学図書が中心であった。またこの図書館の蔵書の特色は、全体蔵書量の26%を占める個人文庫及び特殊文庫の存在であった。それにはクニープ (Ferdinand Kniep) 氏のローマ法関係図書 5,639 冊、テジュール (Friedrich Tezuer) 氏のオーストリア憲法及び行政法関係図書 967 冊、ツェテルマン (Ernst Zetelman) 氏の民法

関係図書 879 冊、ゾンバルト (Wernner Sombart) 氏の経済学関係図書 3,254 冊、ミュンスターヴェルク (Osker Münsterberg) 氏の東洋学関係図書 366 冊、ブラウン (Mcleary Brown) 氏の東洋学関係図書 633 冊、八木又三氏の英文学関係図書 973 冊、島本愛助氏の倫理学関係図書 616 冊、朝鮮経済研究所の図書 (経済文庫) 6,600 冊、それに奎章閣図書 128,184 冊があった。

この中でも奎章閣図書は、韓国においてだけでなくアジアにおいても有数の貴重な文庫 (朝鮮本、中国本の古書から成る) であった。この奎章閣は 18 世紀末に李氏朝鮮によって設置された宮廷文庫であったが、日韓併合後朝鮮総督府によって接収され、それが 1928 年から 30 年にかけて京城帝国大学に移管されたものであった。

(3) 図書館奉仕

この図書館の利用に関しては、1938 年 2 月に制定された『京城帝国大学附属図書館規程』に詳細に記されている。この規程には、図書区分 (通常図書、貴重図書、特殊図書、奎章閣図書)、閲覧、「借受」(館外貸出)、「備付」(参考図書、事務用図書など備付け図書)、「検索」(書庫立入)、「謄寫撮影」(複写、写真撮影) があった。

この図書館は現在の大学図書館と比較してかなりの相異点がある。この最大のもは、図書館の利用が教職員優先になされ、ほとんど学生への配慮が見られないことである。学生は館内閲覧のみに限られ、館外貸出がいっさい認められなかった。また教職員には書庫立入が認められたが、学生には認められなかった。そ

の上、閉架式書架制をとっていたため学生にはより不便であった。また教職員の中においても、教授、助教授、講師、学生主事、事務官、司書官、薬剤官、予科教授、予科講師、助手、副手などの身分により、その貸出冊数、期限などにかなりの差をもうけていた。今日の大学図書館で一般的に見られる参考業務もまだ行なわれていなかった。

全体的に見てこの図書館は、蔵書面では韓国図書館史に大きな寄与をなしたが、大学図書館としての運営面ではほとんど評価すべきものを残さなかったと言えよう。

2 官立専門学校図書館

(1) 京城高等商業学校図書館

現在のソウル大学校商科大学の前身である京城高等商業学校は、1908 年 10 月東京東洋協会専門学校分校として設立された。その後 1915 年 8 月東洋協会殖民専門学校京城分校に、さらに 1918 年 4 月東洋協会京城専門学校、1920 年 5 月私立京城高等商業学校と改称し、1922 年 4 月官立に移管し、京城高等商業学校となった。

1920 年 12 月図書館が新築された。これは朝鮮における学校図書館としては最初の独立建築であった。図書館に関する規程は、「京城高等商業学校細則⁶⁰⁾」第 11 条「図書館規程」(全 17 条) によった。それによると、図書館の事務は図書課によって担当された。閉架式書架制をとっていた。閲覧及び館外貸出は、職員は各 10 部 20 冊まで、学生は各 2 部 4 冊までとなっていた。

(2) 京城医学専門学校図書館, その他

京城医学専門学校をはじめ他の官立専門学校の場合、独自の図書館建築を有さず、小規模の図書室を備えていたにすぎない。

現在のソウル大学校医科大学の前身である京城医学専門学校を例にとってみると、簡単な図書館規程を有するにすぎない。まず「京城医学専門学校事務分掌規程⁸⁸⁾」中には、図書係は「図書出納保管ニ関スル事項」と「図書室及閲覧室ノ管理ニ関スル事項」をつかさどるとある。また「京城医学専門学校處務規程⁸⁹⁾」中には、「各教室ニ於テ日常必要ノ図書及雑誌ハ当該教室ニ備付ケ其ノ他ハ図書室ニ備付ク」とあり、その図書の貸出は「図書借覧簿」に必要事項を記入して図書係に申し込めばよいとある。これから察するに、このような小規模の学校図書館にあってはかなり弾力的、開放的運営がとられていたと推測される。

その他の専門学校、京城法学専門学校(1895年3月「法官養成所」の名で設立、現在のソウル大学法科大学の前身)、朝鮮総督府高等農林学校(1906年9月「農林学校」の名で設立、現在のソウル大学校農科大学の前身)、京城高等工業学校(1906年「工業傳習所」の名で設立、現在のソウル大学校工科大学の前身)、朝鮮薬学校(1918年設立、現在のソウル大学校薬科大学の前身)、京城齒科医学校(1922年設立、現在のソウル大学校齒科大学の前身)などの図書館については、資料が少なく詳しいことはわからないが、京城医学専門学校の場合と大体同じ状況であったと推測される。

3 私立専門学校図書館

(1) 普成専門学校附属図書館

現在の高麗大学校の前身である普成専門学校は、1905年李容弼によって設立された。李は日本より多数の図書と印刷機器を持ち帰り、出版社として普成館、印刷所として普成社を作っただけでなく、教育機関として普成小学、同中学、同専門学校を設立した。この普成館と普成社は多数の国内外図書を所蔵していたので、当時図書館と呼ばれていた。したがってこの普成館、普成社は高麗大学校における図書館の嚆矢とされている⁹⁰⁾。しかしこれらの機関は外国図書を朝鮮語に翻訳して教材として出版することを目的としたもので、現在の図書館の機能である閲覧、貸出などの機能をそなえていたかどうか不明である。

この学校に本格的な図書館が設立されたのは、1937年9月のことである。これが日本統治期において朝鮮人によって設立された学校図書館の中で最大かつもっとも近代的威容を誇った普成専門学校附属図書館であった。これは私立学校図書館の中で唯一の独立建築であったが、設立に当って多くの朝鮮人有志の寄付によって建てられた点が特徴である。

この学校は創立30周年の記念事業として、図書館、大講堂、体育館の建設を計画した。全国の有志約500名が発起人となり、この事業の趣旨文(『普成専門学校創立三十周年記念事業会趣旨』⁹¹⁾)を世に問うた。この中で、図書館等の施設を具備し、現在の法・商両科以外に文・理・医・農・工等の諸科を包含した総合大学をめざすことが、この学校が「名実ともに朝

鮮文化の源泉となり、朝鮮人材の淵藪となる」道だと述べている。このような民族的期待をになって誕生したこの図書館は、工事費約22万円、2年の歳月をかけて、総建坪約944坪の石造3階建の近代的諸設備を備えたものであった。

校長金性洙の熱烈な呼びかけに応じて、全国から多くの図書が寄贈された。1939年には総蔵書量が23,870冊に達した。

職員は館長はじめ司書（1938年まで2名、以後4名）すべて朝鮮人であった。これら少数の司書によって、植民地期の経営困難な私立学校図書館が維持、発展させられていったことは決して忘れられてはならない。

(2) 延禧専門学校附属図書館、その他

延禧専門学校（現在の延世大学の前身）は、1915年アメリカの宣教師アンダーウッド（H. G. Underwood）によって徹新学校大学部の名で創立された。1917年には延禧専門学校となったが、この学校は普成専門学校が民族系私学の代表であるのに対し、キリスト教系私学の代表的存在であった。

延禧専門学校附属図書館は、アンダーウッドの寄贈図書約30冊をもって始まったが、1924年4月アンダーウッド・ホールが竣工し、その3階に附属図書館が設置されて以来大いに発展した。蔵書数は1924年に5,797冊であったものが、1932年に22,586冊、1937年には51,892冊に達した。その中には、黙容室文庫（9,458冊）韓氏文庫（6,540冊）など朝鮮及び中国の古典籍から成る13の記念文庫が含まれていた⁸²。それらはすべて朝鮮人個人や同

校の教職員や卒業生の寄贈によるものであった。

この図書館の特徴は、1930年頃にはすでにデューイ十進分類法によって蔵書整理をしていたこと、閲覧目録としてカード目録を使用していたこと、学生に対して参考奉仕をしていたことである。また基本的には閉架式であったが、かなり多くの図書、雑誌を開架にしたこと、それと各学科研究室に図書室を設置し、蔵書の分散管理をしていたことが特徴であった。さらに、教職員、学生だけでなく、必要と認めれば学外の人達にも貸出をしていたことが注目される。

この図書館には「附属図書館委員会」が置かれ、図書館運営に関する大綱を審議、決定した。また貸出、書庫立入、図書の謄写、撮影などを定めた「延禧専門学校附属図書館図書管理規程」⁸³があった。この図書館は全体的に見て、独立の図書館建築を有さなかったが、蔵書数も多く、運営面もかなり良く整備されていたと言えるであろう。

その他の専門学校としては、解放後延世大学校医科大学となったセブランズ聯合医学専門学校の図書館が有名である。この図書館の始まりは、1909年セブランズ病院医学校によって設けられ、韓国における高等教育機関の中でもっとも古い図書館であった。

他に梨花女子専門学校（現在の梨花女子大学の前身、1887年「梨花学堂」として設立）、中央仏教専門学校（現在の東国大学の前身、1915年「中央学林」として設立）、崇実専門学校（現在の崇田大学の前身、1907年「崇実学校」として設立）、淑明女子専門学校（現在の淑明女子大学の前身、1938年設立）、明倫専門

学校（現在の成均館大学の前身、1930年設立）などの私立専門学校にも図書館は置かれていた。しかしこれらは独立の図書館としての建物を有せず、図書室程度の小規模の図書館であった。蔵書数も少なかった。図書館運営にあつては普成専門学校や延禧専門学校の図書館と大体同じであつたろうと推測される。

おわりに

最後にまとめとして、植民地期朝鮮の図書館運動の特質とその運動の制約条件を分析しておきたいと思う。なぜならそれが、解放後韓国の図書館運動の課題と性格を明らかにする重要な手がかりとなるからである。

近代韓国図書館運動の課題は、他のアジア後進諸国の場合と同じく、いかに欧米の近代的図書館思想、技術を導入し、土着化させ、どのように韓国独自の図書館像を形式していくかにあつた。しかし、不幸にも後発の帝国主義国家日本の植民地となつた韓国において、その図書館運動もいやおうなく変質せざるをえなかつた。すなわち日韓併合以後、日本人による図書館運動が開始され、ほとんど欧米流の近代公共図書館の経験のなかつた朝鮮に、日本的な図書館運動が移植された。これは1920年代以降盛んになる日本人による官公立図書館運動に象徴されるように、大都市中心の図書館運動であり、その図書館経営も資料の保存中心、館内閲覧中心、しかも有料制で閉架書架制をとるものが多く、利用者の便はあまりかえりみられなかつた。このような図書館は都市住民の一部（知識階層や有閑層）に

は若干の益をもたらしたかもしれないが、大多数の朝鮮民衆からはかけ離れた存在であつた。しかも、朝鮮総督府図書館や京城帝国大学附属図書館は植民地政策遂行のための資料提供機関と位置づけられ、全体として官公立図書館は植民地文化政策の一翼を担われた。

一方、開化期に若干の萌芽をみた朝鮮人による図書館運動は、日本統治下では行政から冷遇され、日本人図書館関係者からもほとんど援助を受けることなく、独自の運動を展開した。その運動の特徴は、大都市よりも小都市や農村に目を向けたこと、また大なり小なり「朝鮮民衆の文化啓蒙」という民族的動機をはらんでいたことである。郷校財産による図書館設立、農村青年による図書館設立運動、農村文庫設立運動などすべてそうであつた。このように日本人による図書館運動と朝鮮人による図書館運動は、相互に影響をおよぼしながらも、結局は一体化することもなく、植民地期朝鮮の図書館運動の二重構造を形成することになった。まさにこの二重構造的なこの時期の図書館運動の特質でもあつた。

しかし、朝鮮人による図書館運動も日本人による図書館運動も、図書館運動という共通の視点からみると、ともに弱体であり、不振であつた。日本人図書館人も朝鮮人図書館人も、熱誠こめてうちこんだ運動であつたにもかかわらず、韓国図書館史上から見てこの時期の運動成果はあまり豊かではない。ではなぜこの時期の運動は不振であつたか。私はその要因として、次の5点を指摘しておきたいと思う。

まず第一は、朝鮮総督府の図書館政策の不毛に原因があつた。植民地期を通じ

て、総督府は朝鮮総督府図書館と京城帝国大学附属図書館の経営には力を入れたが、他には図書館政策らしい政策は何ら行なわなかった。1920年代以後、社会教育の対象とみなしたが、それは多分に統治当局に都合のよい“社会教化”機関、“思想善導”機関として認識したにすぎなかった。戦争末期には、図書館を“不要不急”の事業として冷遇した。

第二は、全人口の七割を占めた文盲の存在である。これは図書館の利用者を大きく制限する原因となり、朝鮮の図書館発展に大きなブレーキとなった。この事実は当時の朝鮮の図書館人にもつよく認識されており、“文盲撲滅”ということが図書館運動の一つの課題となっていた。

第三は、朝鮮における図書館資料の問題である。植民地期一貫して朝鮮語書籍の出版が制限されたこと、また常に“不穩書籍”の取締が行なわれたことは、図書館蔵書構成上に大きな影響を及ぼした。それは蔵書の大部分を日本語資料が占める結果をもたらし、日本語を解する者が少なかった当時の朝鮮人の足をますます図書館から遠ざけた。

以上の三点が図書館運動不振をもたらした外在的要因とするならば、次の二点は運動内部の内在的、主体的要因と言えるものである。第一は、図書館運動における強固な連帯関係を形成しえなかったこと。これは日本図書館界と朝鮮図書館界の間についても言えるが、朝鮮図書館界内部についても言える。朝鮮図書館連盟の結成は、主要な官公立図書館を結集したが、大部分の朝鮮人設立になる図書館を結集するには至らなかった点で限界があったと言える。

第二は、図書館運営上に問題があった。

日本人設立になる官公立図書館は言うにおよばず、朝鮮人設立になる図書館にも当時の日本の経営形態が影響をおよぼした。それは保存本位、館内閲覧中心、有料制、閉架制などの運営方法であった。これは民衆が要求する真の図書館サービスからはほど遠い方であったと言える。

かくして、以上の植民地期朝鮮の図書館運動の分析を通して言えることは、解放後韓国の図書館運動にかせられた課題は、植民地期図書館運動の諸制約を一刻も早く克服し、真に民族の発展に奉仕し、民衆に開放された近代的図書館を創出していくことであった。

(なお本稿執筆にさいし、韓国国会図書館の李鎮相氏および国立教育研究所の阿部洋氏より資料の提供と教示を得た。紙上をかりて厚くお礼を申しあげる。)

注

- (1) この事件については多くの文献がふれているが、押収図書の数については諸説がある。『毎日申報』(1910, 11, 16)や『朝鮮総督府官報』(1910, 11, 19)には、冊数はあげられていないが、51種の図書の名が記されている。趙容萬『日帝下韓国新文化運動史』(正音社, 1983)には“30余種の数万巻の書籍を一朝にして焼却し”とある。なおこの事件については、河田いひ『1910年の焚書』(『季刊千里』47号; 1986.8)が詳細な分析を試みている。
- (2) 吳允台『日韓キリスト教交流史』新教出版社, 1968 p.130~131
- (3) 権恩環「開化期・日帝治下の公共図書館に関する研究(1)」『図書館研究』(ソウル, 韓国図書館協会)22巻4号; 1981, 7/8 p.16
- (4) 『隈本繁吉文書』については、渡部学「統監府時代の朝鮮教育史料としての「隈本繁吉文書」

- について」(『日本の教育史学』教育史学会紀要第13集, 1970)に詳細な紹介がある。
- (5) この「整理案」は、隈本によって1910年後半に執筆されたもので、116頁手書き文書である。当時公表されたものではないが、朝鮮人私立学校、教科用図書、朝鮮留学生に関する教育行政上の彼の見解がまとめられている。この最後に、希望事項の一つとして官立図書館設置案が述べられている。筆者は本資料を阿部洋(国立教育研究所)氏の好意により閲覧の便宜をうけた。
- (6) 拙稿「近代韓国公共図書館史の研究」『参考書誌研究』30号; 1985.9 p.5~6 “佐藤寛の図書館論”参照。
- (7) 隈本繁吉「◎教化意見書」『韓』3巻10号; 1974.10 p.127
- (8) 拙稿上掲論文 p.8~9参照
- (9) 宮坂広作「近代日本社会教育史の研究」法政大学出版局, 1968 p.5~9参照
- (10) 『朝鮮社会教化要覧』朝鮮総督府学務局社会教育課, 1938 p.69~70
- (11) 松村の主要な論著は次のようなものがある。著書として『民衆之教化』帝国地方行政学会, 1922。論文としては、「学校を中心とする社会教化」(『朝鮮』77号; 1921.6), 「朝鮮教育令公布記念事業の一つとして図書館の設立を奨む」(『朝鮮』85, 87, 88号; 1922.3, 1922.6, 1922.7の三回連載), 「民衆教化の運動」(『朝鮮』93号; 1922.12)。
- (12) 松村松盛「学校を中心とする社会教化」『朝鮮』77号; 1921.6 p.99
- (13) 松村松盛「民衆之教化」帝国地方行政学会, 1922 p.49~93
- (14) 拙稿 上掲論文 p.11~12を参照のこと。
- (15) 『朝鮮総督府施政年報 大正十四年度』朝鮮総督府, 1927 p.165
- (16) 『国立中央図書館史』国立中央図書館編刊, ソウル, 1973 p.161
- (17) 京城図書館については、拙稿上掲論文 p.14~18 “京城図書館”の項参照のこと。
- (18) 水野鍊太郎「朝鮮総督府図書館創立二十周年記念日記事を読み」『文献報国』10巻5号; 1944.5 p.5
- (19) 大山一夫「道立図書館建設を提唱す」『朝鮮之図書館』1巻3号; 1932.2 p.1~4
- (20) 『東亜日報』1931.12.7 1面 「金仁貞図書館」。また山本春喜(朝鮮総督府司書)は「西鮮の図書館」(『文献報告』5巻2号; 1939.2)の中で、仁貞図書館が“平壤府民文化向上発展のために万丈の気を吐いている”と評価している。
- (21) 『東亜日報』1924.8.27 3面 「鎮南浦図書館 姜偉情君の特志で設立」
- (22) 『東亜日報』1928.10.5 3面 「遠からず竣工する白善行紀念館 宏大な石造三層建物」
- (23) 『東亜日報』1927.10.7 3面 「金剛図書館」
- (24) 『東亜日報』1927.7.12 4面 「尚州に図書館 儒道振興会で準備」, 『東亜日報』1928.4.13 4面 「尚州図書館 昨日開館準備」
- (25) 『東亜日報』1926.7.9 4面 「定州簡易図書館」
- (26) 『東亜日報』1926.5.18 4面 「図書館設置」
- (27) 『東亜日報』1927.5.21 4面 「信川図書館 遠からず完成」
- (28) 『東亜日報』1931.2.16 3面 「通川図書館」
- (29) 例えば、平安北道の宣川会館図書館縦覧所は『私立宣川会館図書館縦覧所一覽』(昭和11年7月末日現在)の中で、“朝鮮民衆ノ文化啓発ヲ目的トシテ”とその設立目的を明らかにしている。
- (30) 『東亜日報』1924.3.7 4面 「朝光図書館計画」
- (31) 『東亜日報』1925.2.21 4面 「新高山図書館」
- (32) 『東亜日報』1925.6.22 3面 「図書館計画 新人同盟で」
- (33) 『東亜日報』1925.7.16 3面 「図書館開館式 二十五日水原で」
- (34) 『東亜日報』1925.11.30 4面 「簡易文庫設置 金陵青年会で」
- (35) 『東亜日報』1925.3.29 4面 「図書館計

- 画 咸北青年連合会で]
- (36) 『東亜日報』 1926.1.31 4面 「昌原に簡易図書館」
- (37) 『東亜日報』 1926.4.28 4面 「黄州図書館 五月一日開館」
- (38) 『東亜日報』 1926.9.21 4面 「図書館設置 星州青年会で」
- (39) 『東亜日報』 1927.3.3 4面 「簡易図書部一般縦覧開始 鎮海青年会で」
- (40) 『東亜日報』 1927.11.22 4面 「淳昌に文庫」
- (41) 『東亜日報』 1927.1.25 4面 「正光文庫 拡張 七百円予算で」
- (42) 『東亜日報』 1927.10.3 4面 「図書館開設 居昌青年活動」
- (43) 『東亜日報』 1925.8.10 3面 「簡易図書館 歙谷普校卒業生発起」
- (44) 『東亜日報』 1928.8.27 3面 「江陵図書館落札」
- (45) 『東亜日報』 1928.11.16 4面 「龍岡図書館 拡張して公開」
- (46) 『東亜日報』 1927.3.19 4面 「図書室設置」
- (47) 『東亜日報』 1925.12.20 4面 「文庫設置 地方文化向上をめざし 本報固城支局で」
- (48) 『東亜日報』 1927.5.13 4面 「図書館開館式」
- (49) 『東亜日報』 1934.1.13 3面 「殉死したトマス牧師の記念図書館設立」
- (50) 青木修三「最近に於ける朝鮮の図書館界」『文献報国』 7巻11号；1941.11 p.5
- (51) 『施政三十年史』 朝鮮総督府, 1940 p.392~394
- (52) 『京城日報』 1934.11.28 1面 「社会教育の道場に図書館を活用させよ」
- (53) 宇垣一成「図書館の二大使命—全国図書館大会に於ける講演」『文献報国』 1巻1号；1935.10 p.2~6
- (54) 永末十四雄『日本公共図書館の形成』 日本図書館協会, 1984 p.279~286
- (55) 宇垣一成 上掲論文 p.5
- (56) 島崎末平「全国図書館大会所感」『文献報国』 1巻1号；1935.10 p.1
- (57) 「第二十九回全国図書館大会諮問答申」『図書館雑誌』 29巻12号；1935.12 p.452~453
- (58) 荻山秀雄は, 1881年9月14日愛媛県に生まれた。1910年7月京都帝国大学文科大学史学科卒業。1912年7月文部省開催図書館講習会終了と同時に, 母校の附属図書館嘱託となる。1914年5月李王職図書掛嘱託として朝鮮に渡る。1916年10月朝鮮総督府朝鮮半島史編輯官に転じ, 1918年1月総督府中枢院史料蒐集編纂事務も嘱託せられる。1920年4月京城高等商業学校講師となる。1923年11月朝鮮総督府図書館長に就任し, 1945年8月日本敗戦まで一貫して館長職にあった。日本引揚後は東京都立日比谷図書館に勤務し, 青年館員の教育にあたった。1948年5月愛媛県立図書館長となり, 1950年2月まで在職。1948年には日本図書館協会顧問になる。1956年5月14日松山市にて死去した。
- (59) 荻山秀雄「朝鮮図書館の将来(上)」『京城日報』 1935.11.7 3面
- (60) 「第二十九回全国図書館大会記事」『文献報国』 1巻1号；1935.10 p.35~38
- (61) 同上論文 p.55
- (62) 李在都「農村図書館の経営法」は, 1935年にソウルの漢城図書株式会社から刊行された。45ページ, 朝鮮文のパンフレットであった。これは朝鮮で朝鮮人によって書かれた最初の図書館学関係書であった。
- (63) 姜辰国の主要な論文は次のとおりである。「農村事業を附帯した農村文庫創設の急務」『東亜日報』 1936.2.27~3.11 全9回連載, 「農村文庫経営論その必要と方法について」『東亜日報』 1937.10.8~12.4 全24回連載, 「農村文庫に備する農村指導図書」『東亜日報』 1937.12.5~12.12 全3回連載, 「農村文庫建設の急務(一)~(二)」『朝鮮之図書館』 5巻6号~6巻1号；1936.12~1937.7
- (64) 姜辰国「農村文庫建設の急務(一)」『朝鮮之図書館』 5巻6号；1936.12 p.4
- (65) 「鮮内農村文庫の近況」『朝鮮之図書館』 6巻3号；1938.2 p.55
- (66) 戸毛三良「不急事業か不朽事業か」『文献報

- 国』8巻8号；1942.8 p.1 戦時期、為政者の一部には「図書館は不急事業」であるとして軽視する傾向があったが、これに対し本論文に見られるように、図書館界は「図書館は不朽事業」であるとして反発した。
- (67) 『朝鮮社会教化要覧』朝鮮総督府学務局社会教育課，1938 p.20～21
- (68) 1940年11月に結成。日中戦争の長期化にともない国民総力朝鮮連盟が結成され、朝鮮総督府図書館もその下部機構に組み込まれた。館内機構もそれまでの係制から班制に改編された。
- (69) 「国民精神総動員強調週間」『文献報国』4巻4号；1938.4 p.16 1938年2月11日紀元節より一週間開催された。強調週間に当り関係図書を展示し、宣伝につとめた。以後毎年開催。
- (70) 「国民精神総動員銃後報国強調週間」『文献報国』4巻4号；1938.4 p.1 1938年4月26日から5月2日に開催。「消費節約・勤儉貯蓄に関する図書展列」をした。
- (71) 「文国殿鎮魂式挙行」『文献報国』7巻1号；1941.1 p.30
- (72) 「第一回図書祭執行」『文献報国』9巻10号；1943.10 p.10
- (73) 『文献報国』8巻1号；1942.1 p.1
- (74) 「後凋録 全鮮府私立図書館振興第一次計画」『文献報国』5巻2号；1939.2 p.18
- (75) 「後凋録 全州府図書館開館準備に参加して」『文献報国』5巻3号；1939.3 p.11～13
- (76) 「大田府立図書館開館す」『文献報国』6巻6号；1940.6 p.11～12
- (77) 和山博重「開城の中京文庫」『文献報国』10巻11号；1944.11 p.2～4
- (78) 朴奉石は朝鮮総督府図書館司書。朴奉石については、拙稿「韓国の図書館を育てた人々」『同志社大学図書館学年報』13号；1987.5 p.48～51を参照されたい。
- (79) 朴奉石「朝鮮公共図書館図書分類表私案」は、『文献報国』6巻11号～7巻1号(1940.11～1941.1)誌上に発表された。植民地期朝鮮人によって考案された唯一の図書分類表であった。
- (80) これら諸規程は、「朝鮮図書館連盟創立委員会立絵記事」『文献報国』5巻6号；1939.6 p.22～25に収録。
- (81) 朝鮮図書館研究会は1928年3月結成された。それまであった京城図書館研究会(1926年3月設立)が発展的に解消して本研究会になる。研究会の目的は「図書及び図書館に関する事項を研究して、朝鮮図書館界の発展に資する」こととされた。
- (82) (80)上掲記事 p.22
- (83) 『朝鮮』131号；1926.4 p.41～44
- (84) 「京城帝国大学附属図書館商談会規程」『京城帝国大学一覧 昭和6年』京城，京城帝国大学 p.26～30
- (85) 『京城帝国大学一覧 昭和6年』 p.30
- (86) 京城帝国大学附属図書館の蔵書内容については以下の論文を参考とした。
尹升鉉「日帝下におけるわが国大学図書館に関する研究一特に京城帝国大学附属図書館を中心に一」(成均館大大学院図書館学硕士学位論文) ソウル，1977 p.51～57
金桂淑「国立ソウル大中央図書館篇」『国会図書館報』(ソウル，国会図書館)3巻1号；1966.1/2 p.64～65
- (87) 『京城高等商業学校一覧 昭和13年度』京城，同学校刊 p.59～61に収録。
- (88) 『京城医学専門学校一覧 昭和3年』京城，同学校刊 p.63に収録。
- (89) 同上書 p.67～68
- (90) 李昌教「高麗大中央図書館篇」『国会図書館報』(ソウル，国会図書館)3巻3号；1966.4 p.88
- (91) 『高麗大六十年誌』ソウル，高麗大出版部，1965 p.211～212
- (92) 延禧専門学校附属図書館の蔵書内容については、「延世大中央図書館篇」『国会図書館報』3巻2号；1966.3 p.40～41を参照のこと。
- (93) 「図書管理規程」は、1923年(度)制定，1931年(度)改定された。『延世大百年史』ソウル，延世大出版部刊，1985 p.114～115を参照のこと。
- (うじごう・つよし 調査及び立法審査局 調査連絡課)